

平成 24 年度研究チーム活動中間報告（第 2 回目）

甲南大学生のための SLSP (Second Language for Specific Purposes) 教育の研究

No.123 研究代表幹事 茶山 健二 (理工学部)

「甲南大学生のための SLSP (Second Language for Specific Purposes) 教育の研究」では、甲南大学理工学部機能分子化学科と国際言語文化センターのドイツ語と日本語の科目が協力し、甲南大学生のためのより良い SLSP (Second Language for Specific Purposes) 教育のために、ニーズ分析・コース評価・モチベーションとソーシャルスキルを高める研究を目指して、自律した学習者としての甲南大学生を育成することを研究目的とする。上記の研究目的のもとに、本研究の内容は、以下の三構成から成っている。

1. 機能分子化学専攻学生のための化学英語演習のニーズ分析とコース・デザイン
2. 第二外国語としてのドイツ語学習者の学習成果向上のためのコース・デザインと教材の改善
3. 日本の社会文化に適応するための留学生の日本語能力の育成とソーシャルスキルのトレーニング

上記の 3 分科において、2013 年度に実施した研究の概要は以下の通りである。

1. 特定の目的のための第二言語 (SLSP) に対する学生の学習意識の調査の目的から、本年度も「化学英語演習 1」および「化学英語演習」においてアンケート調査を実施した。全般的に昨年度のアンケートと同様の傾向が見られた。化学分野に関する英語習得の必要性について、やはり化学という特定の分野での学業や就職、就業において、その必要性を強く感じているようであった。「化学の分野で働く上で英語は重要だと思う」という設問 (5 段階中 3 以上が 100%)、および「この講義は私の期待に合ったと思う」という設問 (5 段階中 3 以上が 97%) に対し、どちらも高いスコアであったことから、ほとんどの学生がその必要性を強く感じていると言える。しかし「これまで化学に関する英語を学ぶ機会があったと思う」という設問に対しては、低いスコアとなっており (5 段階中 2 以下が 75%)、理系学部の SLSP 教育における問題点が指摘された形となった。なお本講義ではリーディングのみの演習となっているため、今後は書く、聞く、話すといった点を学ぶ機会を充実させる必要があると思われる。

2. 甲南大学における第二外国語としてのドイツ語教育の質の向上にむけて、調査・研究計画に基づき、2013 年 5 月と 12 月に、基礎ドイツ語クラスにおいて質問紙調査を実施した。調査は、学習者がドイツ語教材のコンセプトをどのように受容しているのか、使用された教材は学習者の動機づけに影響を与えるのか、加えて、最終的な学習成果との関連性を探ることを目的としている。また、5 月と 12 月の縦断調査によって、動機づけの変化も分析対象とする。得られたデータは、随時、統計ソフトに入力している。分析結果とその解釈は、総合研究所叢書に発表予定である。

3. 今年度の日本語科目では、第二言語能力とソーシャルスキルの関連を調査する。ソーシャル・スキルの定義については、1)他者との関係や相互作用のために使われる技能(相川・津村, 1996:5)、2)相互作用をする人々の目的を実現するために効果のある社会的行動(Argyle, 1981)、3) 観察可能で、学習可能な対人関係技術(Furnham・Bochner, 1986)などがある。早矢仕(1996:148)は、文化的差異に起因する困難への対処能力を含めた対人的能力を「異文化接触時のソーシャルスキル」とし、異文化圏で生活するためには対人的能力の他に「その社会のシステムを理解してその社会の中で生活する日常生活スキル(買い物、移動、情報収集などのためのスキル)」というべきものも大切なスキルとして必要であると述べている。本学の留学生の来日時と帰国前の同一の日本語テストと調査紙を通じて、日本語能力とソーシャルスキルはどのように関連し変化するかを研究する。

以上、本年度の成果に関して更なる分析を行い、相互の分科の結果を検討し、併せて、SLSP 教育のためのニーズ分析及びコース評価の研究手法を確立し、甲南大学生が高いモチベーションを保って、実社会に対応可能なソーシャルスキルを身につけることが可能になるコースのモデルを探求し、結果を研究叢書に上梓する予定である。